

大正時代中期の天理教と広池千九郎

——天理教の教勢発展と関連して——

櫻井良樹

目次

- 一、はじめに
- 二、中山真之亮没後の天理教団と広池千九郎
 - (一) 天理教教学部の設置
 - (二) 広池千九郎の対応
- (一) 中山正善の成長と天理教団—変化への前
 - 四、教祖四十年祭への準備と広池千九郎
 - (一) 四十年祭準備と倍加運動の開始
 - (二) 広池千九郎と天理教団との再接近
- 三、天理教の教育施設整備と広池千九郎
 - 五、おわりに

一、はじめに

数年来、天理教と広池千九郎の関係を社会状況の中において追究してきた⁽¹⁾。今回も同様な視角から、大正八(一九一九)年から十一(一九二二)年前半までの時期に限定してまとめてみる。ただし今回は社会情勢の変化、あるいは国家の要請という外側からの働きかけに関連する事項が少ないため、両者の事情の変化を中心とする記述となったことをお断りしておきたい。なお本稿は平成元(一九八九)年に口頭報告したものを修正加筆したものである。この間、天理教団を近代日本社会状況の中において考察しようとした研究が数多く発表されるように

なつて来た。⁽²⁾ 本稿が、そのような研究動向に何らかの貢献ができれば幸である。

二、中山真之亮没後の天理教団と広池千九郎

(一) 中山正善の成長と天理教団―変化への前兆⁽³⁾―

天理教は明治四十一年(一九〇八)年に一派独立を認められて以後、非常に積極的な布教活動を開始した。それは、政府の推進する政策を翼賛しながら(たとえば戊申詔書講演会や三教会同に関する講演会を梶子にして)なされたものであった。

しかし大正三(一九一四)年の暮れに中山新治郎管長(真之亮真柱)が亡くなり、ついで大正四(一九一五)年六月に教団の大黒柱であった松村吉太郎幹事が天理教の独立に関する収賄事件で逮捕されたところから沈滞時代が始まった。松村はこのころの時代について、「内憂外患が種々襲ひ来りて不幸なる節が続出したのであります。其の当時は教徒も信徒も殆んど其の帰趣に迷ひ、局外者をして本教の前途を危ぶました」と回顧している。⁽⁴⁾ ちょうど教祖三十年祭の前後の時期であった。この沈滞時代は大正八ころまで続く。なお松村の収賄容疑事件の裁判は予審・控訴・大審院と続き、大正六年四月無罪が確定して終了した。

ところで中山新治郎の遺児である中山正善は、大正七年三月に小学校を卒業することになっていた。正善の進路をどのようにするかについては差し迫った問題であり、幹部に諮問がなされた。意見は大正六年七月から十一月にかけて検討され、その結果、正善の天理中学校への進学、天理中学校の校風刷新、教理講話の実施、詰所による生徒の監督、特別教室の設置などが決定された。

天理中学校の校長職は、広池の辞任後は松村吉太郎が、松村が収監された後の大正五年四月からは山沢為造が

兼任していた。しかし両者とも教団の事務に追われていたため登校することが少なく、実質的には大井民吾教頭(東京高等師範学校卒、非天理教徒)が校務を司っており、「其方針としては、略々広池前校長の教育主義を踏襲したやうで」あり、そのために「本校は進展に進展を重ねるといふよりも、寧ろ万事現状維持主義に傾き、恨むらくは退嬰沈滞の空気漸く濃厚」であったという。⁽⁵⁾ したがって、この決定は広池が校長であった時代の方針からの変更と位置づけられるものと言えよう。

正善の成長が天理中学校の変化を促したのと同じように、天理教にとって新たな変化がおこった。それは第一に、各地の青年会を統一した天理教青年会の設立であった。大正七年十月十七日、青年取締の本部員(松村、梅谷、高井、板井)より増野道興、山沢為信、喜多秀太郎は呼び出され青年会の世話役を命ぜられ、十月二十五日に天理教青年会が創立された(翌大正八年一月二十七日発会式挙行)。青年会は、「若い人」ではなく、「男性」を意味するものであったが、運営は将来幹部になることが期待される若い人々が行い、青年会の創設は若い力を結集して天理教を発展させるといふ意味を持つものであった。これは将来、正善を補佐する体制構築の布石でもあったとも言えよう。そして青年会が行なった最初の事業は、大正八年から翌年にかけての民力涵養講演会の運営であった。⁽⁶⁾

青年会が男性の集団であれば、女性はどうであったのか。すでに天理教婦人会は明治四十三(一九一〇)年に創設されており、こちらは新たな事業に取り組むことになった。それが女学校の設立である。青年会の発会式と同日の大正八年一月二十七日に、婦人会創立十周年を記念して「本教女子教育の第一歩」として、天理女学校を開設することを決議した。天理女学校は、最初は婦人会独自の事業として行なう計画であったが、同年四月の設立計画発表後、六月には経営を天理教庁に委任し経費のみ負担することが決定され、六月二日には松村吉太郎校

長、諸井慶五郎教頭が任命された。九月一日に出された設立申請（私立学校令にもとづく）は、十月二十二日に認可され、さっそく校舎や生徒控室・寄宿舎・食堂の建築が開始された。このようにして、天理教本部における建築ラッシュ時代が始まったのである（なお青年会でも、近いうちに会館を建築することが決定されている）。

第三に注目されるのは、大正八年十月三十日に、朝鮮に天理教教義講習所を設けることが認可されたことである（大正十一年完成）。これは海外布教の新時代を切り開くものであった。

以上のように大正八年を区切りとして、天理教団は新たな時代を迎えようとしていた。

(二) 大正八年前後の広池千九郎

では広池千九郎は、大正八年前後はどのような活動を行っていたのであろうか。天理中学校長辞職後の広池は、個人的な布教活動のほかに、「斯道会」を通じての国民道徳講演会に参加したり、天理教本部が第一次世界大戦やシベリア出兵に対応して開催した時局講演会や国民道徳講演会の講師を引き受け精神的に全国を巡回講演している。また大正六年ころからは、富士瓦紡績だけでなく、東洋紡績や日本海員救済会・工業教育会など全国各地で「労働問題の道徳的解決法」について講演をし、さらに東京高等師範学校や各地の郡教育会で講演している。

しかし、もともと弱かった体は、あまりにも精力的な活動に絶えきれず、大正八年二月から行われた香川県下での時局講演会の最中に悪化して約三か月の静養を余儀なくさせられることになる。いったんは活動を再開して大阪で労働問題などについて講演するが、やはり静養を必要として、本島支教会長の誘いにより七月から本島での療養生活が始まることになる。

大正八年五月に民力涵養運動に広池が松村から相談を受けたことは、既に前稿で指摘しておいた。しかし広池は、本部の開催した民力涵養講演会には出席していない。これは広池の側に、健康上の理由で出席できないという事情があったことにもよろうが、他方で青年会を中心に講演会の運営が行なわれていたことも関係していたと思われる。本来なら広池が看板となって行われる性質の講演会であったにもかかわらず、広池自らの講演が必要とされていないのである。松村から相談を受けた大正八年五月二十七日に、広池は松村から「あなたでなければならぬことが一代に一度あるか二度あるか、そんな時に間に合うように養生して下さい」と言われている。これは、民力講演会に出席して講演するに及ばずということ言い渡されたとも理解できる。

広池は遺稿のなかに「予に対する某一派の排斥」として「今日迄、本教は講演会と云へは、教外の人を招聘して、地位ある人とか、名声ある人とか云ふのに眩惑されていたのである。それが為め今日迄信者と講演をする者の心と心とが、びつたり相そぐはなかつた傾があつたが、それが今回の講演会では、たとへ講演者に社会的名声は有しなくとも、本教生へ抜きものによつてなされたことと云ふことは、不言の裡に信者と講演者との心と心と相共鳴する所あり、云々とあり」と記している。これは民力講演会が、広池のような名声のある人物ではなくて、社会的名声を有しない教団生え抜きの者によってなされた結果、これまでとは違って良い結果をもたらしたという声が、教内にあつたことを示している。このような意見に対して広池は、天理教本部より排斥されているという感じを、いっそう抱いたのではなからうか。

広池は大正八年後半から大正九年・十年前半までのほぼ二年間、天理教団と特別な関わりを持っていない。一月と十月の大祭に本部には行っているが、幹部との往来は確認できない。本島での静養と東京での上流階級を対象とするモラル・サイエンスの講演活動、個人的なつながりによる地方への布教活動が、広池の活動のおもなも

のである。

しかし、この間に天理教団の姿貌はいっそう加速されていくのである。

三、天理教の教育施設整備と広池千九郎

(一) 天理教教学部の設置

大正八年十月に建設が始められた天理女学校は、翌年四月に開校が予定されていた。それを目ざして九年早々から、天理教庁の経営する諸学校（天理中学校、天理教校）改革が開始された。中山正善は、すでに前年四月に天理中学校に入学している。

天理中学校については、広池、松村、山沢、松村と継承された校長が、一月十九日に山沢為信に代わった。そして長く中学校を運営していた大井民吾教頭も三月十八日に辞職した。天理教校のほうも、山沢為造に代わって一月十四日に増野道興が校長に任ぜられ、大宮兵馬教頭も職を免ぜられた。また二月二十四日には教校学則が変更された。これは「教校の教育が主として知識的のものになつてしまつた」のを改めて、「人それ自身の問題」「如何なる程度迄で、心霊が開発されたか、人格が真実化されたか」という内的条件の教育を重視しようということ⁹⁾を目的とした改革であつたという。

具体的には、それまで自発的に個人個人で行なわれていた「ひのきしん」が教行修養として正課に編入され集団的に行なわれるようになり、「おたすけ練習」が抽象論ではなく生徒を患者と見立てて論ず練習として行なわれるようになり、課外科目として社会事業が加えられ、「お手振」の統一が図られた。また「舞樂教習」が行われるようになり、「宗教概要」と「御本席伝」が授業内容に加えられ、さらに「講演」を廃止して「信仰談」の時間が

設けられるなどの改革が行なわれたのである。¹⁰⁾

さらに入学者数は、大正九年の二月には二六〇名であつたものが、九月より五一七名、十年九月より一一〇三名、十一年九月より二四七四名、十二年九月より三七三七名、十三年九月より四一六九名と飛躍的に増え、それともなつて付属の諸施設も拡張された。

また中山正善の天理中学校入学にあわせて設置（大正七年三月認可済）された天理教校の子習科が九年四月から実施されて、天理中学生徒のうち希望者が天理教教義を予習科で学ぶことができるようになった。科目としては「建国史」、「教典」、「教義要領」の三科目であり、教室は中学校内に設けられた。

それ以前は、松村も山沢為造も名目的な校長にすぎず、中学校は大井が、教校は大宮が実質的な校長であり、天理中学校の教育方針は広池の方針が大井によって引き継がれていたわけであるから、やはり大正九年が天理中学にとつても、天理教校にとつても転換点であつたといえよう。

以上のような天理教団内部の諸教育施設の拡充・整備に対応して、それらを統一し一定の方針を与える組織が求められ、九年三月一日に天理教教学部が教庁内に設置された（二月二十四日認可）。教学部趣旨書には、これまでの諸学校の設置が「本教教義に立脚して、教徒的精神を実現する強き自覚の下に行はれたるに非ず」、つまりいきあたりばつたり設置されてきたことを指摘し、教学部設置の理由を、「各学校を改善すると共に本部としても各学校を統一し、本教校教育の根本を確定すべき必要を認め」たからと記している。そして教学部は「諸種ノ学校図書館教義講習所及講習会等総べて本教教学ニ関スル一切ノ事項」を統括するものとされ（第二条）、松村吉太郎が教学部長に、山中彦七が副部長に任ぜられた。なお教校を辞した大宮兵馬教頭が顧問に任じられたことが、教校彙報欄に記されている。

教育問題だけではなく、組織の充実として天理教本部を財団法人化することも同時に行なわれている。大正九年三月十八日に財団法人天理教本部が認可され、ここに天理教本部の諸施設は中山家の手許をはなれて教団の所有となり、また理事會が設置され、寄付行為も整備された。そして理事長に松村、常務理事に梶本などが選ばれている。また部下の大教会に対しても、それぞれ財団法人とするように通達されたのである。

以上のような天理教団組織の整備・充実について、大正九年十月に松村吉太郎は、

大正三年の暮れに前管長が御帰幽になつてから、本教には随分種々な問題が簇出して来たのであります。一時は其の多くの問題を前にして、如何に処置したものであるかと思ひ惑ふた事もありました。然しそれからそれと次ぎ／＼に問題を解決してまゐりまして、只今では教内には差し迫つて如何せなければならぬ云ふ様な、重大な問題は一つも無くなつてしまひました。残つて居ります問題も今年中には、全部解決が付く事になつて居るのであります。前管長の御帰幽を本教に於ける一つの節として見ましたならば、今日迄の道すがらは、要するに其の後始末であつたと云ふ事が出来るのであります。

と諸施策が一段落ついたことを述べ、そして今後の課題が四十年祭にあることを示したのである。⁽¹⁾

(二) 広池千九郎の対応

以上のような天理教団の諸教育施設の整備と組織の充実について、広池はどれほどの關係を持っていたのであろうか。またこのような天理教の「発展」について何を感じていたのだろうか。

広池は天理教青年会ができると同時に、父の半六、長男の千英とともに入会している。しかし青年会の活動に、積極的に関わっている姿は『日記』およびその他の資料からは見ることはできない。⁽²⁾

天理女学校の設立や、天理中学生に対して宗教教育を施す予習科の設置、知識よりも人格の修養に重点を置くという天理教校の改革、さらには天理教の教育を統一的に司る教学部の設置など、このようなことは広池が天理中学校長時代に提案していたことが実現されたということもできる。なぜなら広池は、前管長から天理教教育の充実のための方策について助言を求められており、それに対していくつかの提案を行っていた。たとえば天理中学付属宗教科・天理大学・教理講習所・天理教修道院・大正義塾・女子実用学校・天理教専門学研究所・教学研究所などの設置に関する遺稿が残されている。また追悼講演のなかでも、「只教理を助けざる世間的教育は、御道の中には之を受けしむること益なし」と述べ、さらにつきのよう主張していた。⁽³⁾

学文の必要は今更云ふを須たず。乍併御道に従事させんとするものを、他の世界並の中学に入れ、又中学を卒業せしものを世界並の専門学校や大学や私立学校に入る、如きは大なる誤なり、「中略」御地場にて、教理を土台にしたる専門学校・実科高等女学校の新設及中学の拡張は、先管長様も十二分に必要と仰せられ、松村幹事も素より其必要を認められ、予は其立案を為して本部に差出しあり。

しかし、以上のような改革が行われた過程についても、広池の側からの積極的な関与、あるいは天理教団よりの相談は受けていない。むしろ既に述べたように天理教側の文献では、広池時代の教育方針が転換された時期と位置づけられているのである。

広池の時期の活動の特徴は、本島での静養と、前年より始められた上流布教（華族会館での講演や、山県有朋などへの働きかけ）にある。一月と十月の大祭には本部を訪問しているが本部員との交渉は見られない。『日記』に記されている反省のなかには、自分本位に考えたり行動したりするのではなく、天理教本部を中心に考えなければならぬというものが多い。しかしいっぽうで、教会の自分に対する態度に関する次のような記録も残して

いる。¹⁶

教会の通弊として、博士には信仰なし、只学力のみなれば其話にては助からず、と云ふて中傷して、信徒と
の中を割くやうの愚策を学ばぬよう希望。

教会の中には自分のことを知識のみで信仰がないとして批判しているものがあるというのである。このような批
判をうけながらも、自分は教団に従って行かなければならないと感じていたのではなからうか。

ところで、『斯道』に掲載されている教育学部職員表のなかに、「顧問」として広池千九郎と大宮兵馬の名が記さ
れている。¹⁶ 大宮が顧問に任じられたという記録は『道の友』にもあり、顧問職は教育学部規定にはないにもかかわらず
らず存在していたことは確認できる。しかし、広池が顧問に任じられたという史料は現在のところ他にはない。
しかし訂正記事も見られないところから判断すると、一概に否定も出来ないようだ。一般に大きく公表されな
ったところから考えれば、顧問とは名目的なものであつたろう。広池に関して言えば、実質的な関係もわからな
い。

自分で、「一昨年（大正八年）来、本部之住所は殆ど閉鎖致し本島に隠退¹⁷」する姿になつていたと記しているよ
うに、この時期には教団本部とはほとんど疎遠であつたといえよう。しかし大正十年六月になると、次章に述べ
るような交渉が「復活」してくるようになる。

四、教祖四十年祭への準備と広池千九郎

(一) 四十年祭準備と倍加運動の開始

松村吉太郎が「今後の本教¹⁸」のなかで、つぎの問題は四十年祭だと予告したように、翌年一月二十七日の本部

員会議で、大正十五年一月を期して四十年祭を執行することが決定された。ついで五月十八日に、四十年祭準備
委員として本部員全員・直轄教会長が任命されるとともに、同日新たに五名の新本部員が任じられ、幹部の充実
が図られた。

四十年祭の発表は、天理教内の施設整備を加速させた。三ヶ年計画で予定されていた天理女学校の諸施設の建
築が進められるいっぽう、六月には天理教青年会は青年会館建設計画を拡大して天理教館を建設することを決定
した。また九月二十日には、天理中学校の校舎増築と寄宿舎建築が認可された（これは大正十一年七月に完成）。

これによって詰所から通学していた学生が、一同で暮らすことになるのである。

同年十月十日には山沢為造撰行者は、「教祖四十年祭を一転機として本教は茲に面目を新にして文化の大勢に
乗じて一大飛躍の絶好期に入るべし、是れ本教の歴史に考へ教祖の予言に徴して深く確信する
所なり〔中略〕故に部下一般深く此の趣旨を体し教祖四十年祭の為に渾身の勇奮をなし以て遺憾なきを期すべ
し」という語句を含む四十年祭執行の論達を発表した。¹⁹

そして松村吉太郎は、この論達を教祖の残した言葉を引用して、つぎのように説明している。²⁰

教祖四十年祭は要するに世直りの句であつて、本教が其の面目を新にして世界の大勢に乗じて一大飛躍をす
る絶好の句なのであります。神様も「四ツよなほり」とも、又「四ツよのなか」とも仰せられて、四十年祭
には総てのことが立替へられることも、又四十年祭は「よのなか」をも意味して、即ち「よのなか」は
んじやう」であつて、本教布教上に於て大なる収穫のあることを予め仰せられて居るのであります。仍て
之を本教の實際上より又は本教の歴史より、或は教祖の予言に徴し、又世界の趨勢より考へても、教祖四十
年祭は本教の一転機なるを知るを得るのであります。〔中略〕更に之を教祖予言の上から考へても、「七十五

年たてば日本國中道あらく、それから先は世界中隅から隅まで」と仰せられてありますが、今年巳に立教八十五年に相当して居るので、御言葉通り、支那朝鮮にも道がつき初めて居るのであります。想ふに今後益々海外に趁つても布教せねばならぬ時節となつて居るのであります。つまり四〇年祭を天理教の一大飛躍の転機としようという目標が立てられたのであり、それは国内のみならず海外に向けても布教を行おうということも含んでいたのである。

さらに十月二十五日には、『御教祖四十年祭』が発刊され、一般の教徒に対して広く四十年祭執行が宣伝された。そしてこのころから、「倍加運動」という言葉が使われはじめた。これは、天理教のすべての活動を二倍にすることを目標としたもので、たとえば「道の友」は、従来は月一回発行であったのが、大正十一年六月五日号（三六七号）より月二回発行に「倍加」している。倍加運動については、信仰の深みも倍加しなければならぬと述べる論者は多かったが、実際は信徒数や教会数・神饌の額など形式上の倍加が重視される傾向があった。

大正十一年一月二十七日には、四十年祭に関する講習会を開催することが決定され、これは三月二十八日より四月二日にかけて行なわれた。このとき山沢為造が「地場の真義」、松村吉太郎が「四十年祭と其活動」、板倉穂三郎が「教恩と奉謝」と題して三時間ずつの講義を行なっている。また三月六日には支庁長の大移動があり、東京と岡山以外はすべて更迭された。古い人々を本部に集め四十年祭準備に従事させるとともに、地方に若手を任ずることによって活動の活性化を図るといふねらいを持った交代であった。

諸施設の方も、四月には、天理女学校を充実させて天理高等女学校を創設することが決定され、七月八日に設置認可、翌大正十二年四月に開校した。また大正十一年五月十四日に、朝鮮教義講習所が完成している。さらに中学校の本館、寄宿舎の建設、養徳院の移転、天理教館の建設、天理高等女学校校舎の完成などが十一年中にあ

り、翌年六月には別席場と御供所が新築、炊事場が移転している。各詰所の新築・拡張も、つぎつぎと開始されている。このうち朝鮮教義所は、松村が大正十年十月の論達の説明のなかで、海外布教を重視すると述べたことに関係して設立されたものである。松村は、さらに大正十一年の青年会総会席上で、とくに海外布教の必要性を強調している。⁽²¹⁾

(二) 広池千九郎と天理教団との再接近

広池はあい変わらずの生活を続けていた。大正十年一月、下関より天理教本部へ行き、続いて病状が悪化し二月から五月末まで「死を決して」本島に行く。五月下旬に東京に戻り、六月に入る。ところが六月六日に出された甲賀詰所員の山崎留次郎からの書簡が届く。それには教団本部の広池に対する小言が書かれていたようである。⁽²²⁾ 広池は急遽天理教本部へ行き弁明を行っている。六月二十五日付けの謝罪状が残されている。それによれば、教団本部に通知なしに勝手に本島に行っていたことが問題視されていたことがわかる。またそれまでの間、広池と本部員との間に緊密な連絡がなされていなかったことも窺われる。謝罪状では連絡なしに本島に滞在していたこと、大祭に出掛けても幹部のところへ挨拶に出向かなかったことを詫びており、「今後の処はすべて御差図に従ひ、住処旅行共に、一々御本部と幹事様とに御届可仕事」と記しているのである。

しかしこの事件は、あらたに広池と本部との関係を「復活」させるきっかけとなった。——というより、この時期になって教団本部が広池を必要としたからこそ、連絡が取れなかったことが問題視されたと考えられる。なぜなら弁明を行ったその席で、教団側から「新たに教校へ教理仕込みを依頼せら」れているからである。そしてさらに二日後の二十七日に松村幹事と面談し、相談の結果、広池の今後の行動方針が決定されている。それはつ

ぎのようなものであったからである。

- 一、およそ一か年を三分致して、御地場と東京と地方巡教とに充つること。
- 一、御地場にては、教校生に教理を講述致し候こと。
- 一、東京にては教理研究致し候こと。

既に述べたように、本部では、この年の一月に四十年祭を實行することが決定され、五月には委員が任命され、すでに年祭に向けて準備が開始されていた(十月十日に四十年祭に向けての論議が発表される)。広池は、この相談について「四十年祭迄には、大に部下之精神もつくらねばならぬとの御事にて、右教校生に対し、小生より教理の仕込み致し候様にとの御相談有之候、仍て小生思案の上、〔中略〕一年中適宜の時、三、四ヶ月は御地場に居住の事」に決したのでと諸岡長藏宛の書簡で説明している。すなわち一時疎遠となりかけていた教団本部との関係が、教団側からの働きかけによって「復活」しつつあったと言えよう。

この日、広池は、どんなことがあっても自分の不徳であると自覚し「御道一条の心かはらず、御本部の御高恩忘れざる事」、どんなことがあっても前管長との約束であった教理の研究を完成させること、その教理は「世界の平和幸福を図る外、教会制度と矛盾せず、人心救済の出来候様に」最善の努力をすること、そして「御本部の御検閲を受けざれば、発表せざる事」を改めて決心している。

広池は松村と相談した方針に従って、さっそく七月八日・九日に天理教校で講話を行ない、恒例となっていた本島滞在は十日間で切り上げ、七月二十四日から天理教本部に滞在中にして「過暑を神命なりとして喜²⁶んで過ごすことになるのである。

さて、このころ広池が自分の事業として取り組んでいたことは、モラルサイエンスの研究(すなわち道德の科学的研究)と、それをを行うための組織(すなわち研究所)の設立であった。モラルサイエンスというのは、道德実行の効果を科学的に実証しようという意図から考え出されたものであり、道德の指す内容は人間のあらゆる精神作用を含むものであった。広池の学問研究史・精神史上においてモラルサイエンス研究を位置づけるとしたらそれは二〇代から始まった歴史の発展を道德の在り方から説明しようとした試み、三〇代を中心とする東洋精神の探究、四〇代からの神道思想研究に、宗教研究が加えられたものと言うことができよう。

その研究所をどこに設立するか、また研究目的を宗教研究を中心とするのか、それともっと幅広く宗教を含む人間の精神的営み全般を扱うのかどうするかということが、研究にあたって気にかかっていたことであった。そしてこの時期は、教団本部との関係が「復活」しつつあったこともあり、「御地場に地所、家屋を求めて研究所を設立し²⁷」、あるいは「いかなる事あるも、御地場に私費をもつて教理の研究所を設けて、自分の根拠地と定めて生涯を送り、且つ没後、研究所は基金を添えて教会に保管を託し、併せて自宅は広池家の子孫の天理教奉仕者に与え、永久本部に奉仕せしめて、人心救済に貢献せしむること」と記されており、より天理教と関係の深いものにしようという意図が窺えるものとなっていた。

広池はこの年の十月まで天理教本部に滞在中。こんな長い滞在は大正四年の天理中学校長辞職以後には無かった。そしてこの間に天理教との関係は、さらに深まる気配を示すのである。九月十五日に、松村吉太郎より「教校の職員になってくれまいかとの相談」を受ける。これに対して広池は「当夏のごとくに客員に願いたし」と答え、教理研究こそが前管長から自分にまかせられた仕事であるということを話して松村に了承してもらっている。

年が改まって大正十一年一月末の大祭に天理教本部を訪れた後、二月六日から二十二日まで本島へ行くが、二

十三日には再び天理教本部へ戻り、三月上旬まで滞在する。この天理教本部での滞在も異例である。この間の二月二十三日には、三月に行なわれる予定の「四十年祭に関する講習会」で山沢、松村、板倉が講義する原稿の訂正を命ぜられ、二十五日には前管長夫人より中山正善の大学進学について相談を受け、歴史に進むことを推薦している。

そして四月七日から朝鮮半島に渡るのである(六月二十日まで)。この朝鮮巡回は、以前より本島支教会から頼まれていたことで、病状の悪化のため延期されていたものであったが、ちょうど五月十四日に天理教の朝鮮教義講習所が完成し、広池もその落成式に参加していること、および松村がしきりに海外布教の必要を述べていることなどから考えると、本島の要請と天理教本部の方針が一致したことによって実現されたというふうに理解できる。

六月二十九日に天理教本部へ戻り、七月四日に松村を訪う。そこで重大な決定がなされる。広池のために勾田に新たな住居を設け、講を開くことが許されたのである。これは直接的には、天理教校の拡張の必要から養徳院を移転させることとなり、養徳院の一隅にあった広池の住まいも移転させる必要から生じたことでもある。⁽²⁹⁾その資金の一部は、山沢為造および前管長夫人より援助されている。しかし同時に将来は直轄講を開くことが許されたのである。これは、広池が本部の何らかの機構に再び位置づけられることを意味するものであった。

このように、大正十年六月から十一年にかけて、広池は再び天理教本部の用事を頼まれるようになっており、自らも組織の一部にかかわっていきうという姿勢が生じていたのである。そして、たとえば大正十一年三月二十四日には四十年祭のお供えを天理教本部と勢山支教会に百円ずつ行なっているように、四十年祭に対する直接の批判および倍加運動への批判めいたことは、まだ述べられていない。

五、おわりに

大正八年から、天理教本部では、中山正善の成長とともに組織や教育施設が整備されてくる。そして大正十年からは四十年祭に向けての天理教の拡張をめざした動きがはじまる。天理教団に大きな変化が現れはじめるのである。大正八年から十年前半にかけて、広池は病気がちであったこともあって、それ以前のような天理教本部の活動からは離れている。しかし十年に入り、四十年祭へ向けて天理教が活動をはじめ、教育施設の拡充がなされると、教団は再び広池を必要とした。それがたとえば天理教校の職員となるよう要望されたところに現れている。広池は、職員となることは断っているが、本部の仕事には再び協力する姿勢を見せ、教団との関係が「復活」しているのである。

以上が大正八年ころから十一年にかけての天理教団の状況と広池の対応のまとめである。天理教団にとって、この時期は一つの過渡期であり、その過渡期という状況のなかで広池はある面で翻弄され、ある面では自分の理想の実現を図っていたといえよう。

しかし、大正十年に「復活」したこのような関係もあまり長続きはしない。大正十一年の後半から天理教本部への批判が際立ってくるのである。そのことについては、つぎの機会に述べたいと思う。

〈注〉

(1) 拙稿「明治末期の社会・天理教・広池千九郎」、『モラロジー研究』二五号、昭和五十三年、「国民道徳運動推

進者としての広池千九郎」、『モラロジー研究』二八号、平成元年、「第一次世界大戦期における天理教団と広池

- 千九郎』、『モラロジー研究』三五号、平成四年。
- (2) 李元範「近代日本の天皇制国家と天理教団」(島園進編「何のための『宗教』か?」青弓社、平成六年)、同「日露戦後の宗教政策と天理教」、『宗教研究』二九四号、平成四年。大谷渡「教派神道と近代日本」東方出版、平成四年。弓山達也「大正期の天理教における天啓者待望」、『神道宗教』一四四号、平成三年。
- (3) 本稿では天理教団の一般的状況については、とくに断らない限り土佐忠雄「天理教青年会史」二巻、天理教青年会本部、昭和五十年、および『道の友』各号の記述、さらに芦田義宣「天理教高安大教会史」下巻、昭和二年などによった。
- (4) 松村吉太郎「天理教青年会訓話」、『道の友』三二七号、大正八年二月号。井出クニや大平良平の問題、北大教会や天理本道の問題なども含まれるのであろう。
- (5) 小松原義則・竹村菊太郎「天理中学三十年史」六五―六六頁、天理中学校、昭和五年。
- (6) 民力涵養に関する天理教団の対応は拙稿「第一次世界大戦期における天理教団と広池千九郎」参照。
- (7) 本稿では広池千九郎の言動については、とくに断らない限りモラロジー研究所編『広池千九郎日記』二巻・三巻の記述によった(以下日記からの引用は「日記」と略記する)。
- (8) 遺稿「子に対する某一派の排斥」大正八年十月二十八日の日記に添付(刊行本には掲載されていない)。遺稿とは広池千九郎博士資料に含まれていることを示す。
- (9) 増野道興「教校の改新」、『道の友』三三九号、大正九年二月。
- (10) 天理教校『天理教校五十年史』八三頁、天理時報社、昭和二十五年。
- (11) 松村吉太郎「今後の本教」、『道の友』三四七号、大正九年十一月。
- (12) 大正四年には兵神青年会の依頼をうけて頻繁に講演していたが、その後は行っていない。ただし自分がかつて所属していた教会の親系統に当たる甲賀青年会の講演会で数回講演している。
- (13) 遺稿「天理中学付属宗教科の新設」大正二年推定、「天理大学設立案」(仮題)大正三年推定、「天理教修道院綱領」大正三年推定、「女子実用学校設立案」(仮題)大正三年推定、「天理教専門学研究所規則」大正四年推定、「教学研究所開設主意書」大正四年。
- (14) 遺稿「管長追悼講演原稿」(仮題)大正四年一月推定(拙稿「大正四年の二つの史料」、『モラロジー研究』三九号、平成六年に掲載)。
- (15) 遺稿「希望」大正十年二月。
- (16) 『斯道』七二号、大正九年九月。
- (17) 大正十年九月十六日付諸岡長藏宛広池千九郎書簡。
- (18) 注(11)に同じ。
- (19) 論達十三号、大正十年十月十日。
- (20) 松村吉太郎「四十年祭と青年会の使命」、『道の友』三六〇号、大正十年十一月。
- (21) 松村吉太郎「天理教の将来と会員の覚悟」、『道の友』三七七号、大正十一年十一月号。
- (22) 『日記』には、「本部のこと申し来る。言語同断のことなり」と記されている(大正十年六月の記述、日付不明)。
- (23) 遺稿「謝罪状」大正十年六月二十五日。
- (24) 大正十年六月二十八日付諸岡長藏宛広池千九郎書簡。
- (25) 遺稿「甘露台様御前にての誓い」大正十年六月二十三日。
- (26) 『日記』大正十年八月二十二日。
- (27) 『日記』大正十年九月六日。
- (28) 『日記』大正十年九月十三日。
- (29) 『天理教校五十年史』八六頁。